

## 第九回 丸山眞男記念比較思想研究センター公開研究会

# 松本礼二・丸山眞男・トクヴェイル

宇野重規

松本礼二先生の『知識人の時代と丸山眞男』について以下論じていくわけですが、私にとって最大の関心は松本礼二先生・丸山眞男・トクヴェイル、この三者の関係です。私自身は松本先生の研究に導かれてトクヴェイルを研究してきました人間であり、同時に丸山眞男という思想家に常に関心を持ってきました。そういう意味でこの三者関係を最終的に考えることが目標ですが、まずはこの本全体の枠組みについている議論していきたいと思えます。

### ある日の思い出

その前になんですけれども、「ある日の思い出」と書きました。これは何かと申しますと、松本先生の『トクヴェイル研究…家族・宗教・国家とデモクラシー』（東京大学出版会、一九九一）という本ですが、この本が出たのが一九九一年です。私が大学院に入った年です。トクヴェイルを研究するという事で勇んで大学院に入ったのはいいのです

が、この松本先生の本が出たことに圧倒されました。私自身トクヴェイルという思想家を、やっぱり家族観とか宗教観、あるいは専制概念、すなわちテイラニーとかデスポティズムといった概念を通じて研究したいと思っていたのですが、松本先生の本にすべて研究されているということ、さて自分はどうしたらいいのだろうか、いささか困ったことをよく覚えております。その際、今日ここにいらしていらっしゃる渡辺浩先生に「私がやろうと思ってるようなことは、もうすべて松本先生の本で出ているんですけれども、どうしましょうか」とご相談したところ、あるパーティーの席で、松本先生のところに私をひっぱって行ってご紹介くださいました。私がそのようなことを申し上げますと、松本先生も困ったことを言ってくるやつだと思われたでしょうが、リップサービス半分、「いやいやまだまだ研究することはあるから」と励ましてくださったことを覚えております。その意味で言う、今回の本も本当に私にとってこれから考えるべき多くの課題が示されており、自分はこれにどう考えていったらいいのか、というこ

とが今日の議論の出発点になります。

## 比較知識人論の試み

では、具体的に議論を見ていきたいわけですが、以下の議論は基本的に第I部を中心とし、さきほど鷲巢先生からもご紹介がありました、幕間の翻訳論の話と第II部の丸山眞男論の話を適宜加えていくことにします。本書の最大の特徴は、比較知識人論の試みだと思えます。松本先生の視点は最初のプロローグで示されているわけですが、二〇世紀というのは結局のところ、「知識人の栄光と挫折の時代」であったのだという問題意識が本書の出発点となります。この場合二〇世紀というのはいつかというと、ドレフュス事件にはじまり東欧革命に終わった、そのような時代を指します。このような意味での二〇世紀は、まさに知識人の時代であったというのが議論の前提となります。

このことを前提に、松本先生は「戦後啓蒙」という言葉を使っているわけですが、この「戦後啓蒙」とフランスの特に左翼知識人の間にある種の並行性を見出します。そして、さきほど二〇世紀は東欧革命までと指摘しましたが、まさに一九八九年はそれまでの知識人の時代に大きな転換を促すきっかけになったとします。つまり、二〇世紀の知識人というのは、何らかの意味で歴史には方向性があると考え、この普遍的な歴史の方向性を前提にみずからの議論を立てていた。これに対して、一九八九年以降は、歴史の大きな方向性といったものの感

覚が失われていく、大きな転換点になったというわけです。そのような意味で、二〇世紀の間に、知識人が一つの社会集団として成立すると同時に最終的にある種の困難に行きつく、その間のプロセスを描くのがこの本の大きな見取り図であるうと思えます。

## 日本の「知識人」

さて、日本の「知識人」です。本書では、一八七〇年代生まれの世代から丸山眞男を含む「戦後啓蒙」の世代までが、日本の「知識人」として検討されます。この世代、といってもさらになかで区別されるわけです。「大正教養主義」の世代、「マルクス主義」の世代、そして「戦後啓蒙」の世代と三つの世代に大きく分かれます。内田義彦の「市民社会青年」論を含めまして、各種の世代論がこれまでも展開されてきて、それはそれで非常に興味深いわけですが、以下この話には深入りしません。むしろ、この一八七〇年代生まれから「戦後啓蒙」までを、一つの知識社会学的に同質な集団と見なした上で、日本の「知識人」をフランス知識人、あるいはアメリカ知識人と比較し、いかなる特質があったかを論じる、そしてなかでも丸山眞男が一つの焦点となっていく。これがこの本の大きな流れであろうかと思えます。

それでは日本の「知識人」というのはどういう特徴を持っているのか。さきほど一八七〇年代生まれということを指摘しましたが、それ以前、たとえば夏目漱石に代表される世代は、学校教育を受ける前に、

漢学を中心とする伝統的な知的訓練を受けて、そのち大学に入って西洋の学問を学んでいる。そうだとすると、一八七〇年代生まれ以降の世代というのは、最初から明治国家によって発展した高等教育を通じて、知識を制度的に獲得した世代ということになります。ですから、ある意味で江戸知識人からの系譜に立つそれより上の世代にかわり、まさに明治の学校教育を通じて育てられた世代、この世代が本書における日本の「知識人」として検討の対象となるわけです。

この世代は基本的に近代西洋の思想と学問というものを、帝国大学を中心とする高等教育機関を通じて学習した世代となります。特に、第一世代が海外から来たお雇い外国人の知識人と直接コミュニケーションをとった世代であるとすれば、それ以降の世代、つまり最初から翻訳された、日本語による教育のプログラムに従って育てられ、みずからの思考を発展させた世代、これが本書において検討される日本の「知識人」ということになります。

ただ、この日本の「知識人」には大きな制約条件がありました。それは何かというと、欧米知識人と日常的交流の経験が乏しいということです。もちろんあとで申し上げる通り、あるいは鷺巣先生が強調された通り、日本の近代知識人にとって留学というのが一つの大きなポイントになるわけですが、その留学というものを除くならば、日常的に欧米知識人と交流することは基本的にない、あるいは乏しい。さらに欧米の知識人を議論するときには非常に重要な要素となる亡命、それこそ第二次世界大戦の際にヨーロッパからアメリカに移住し

た多くの亡命知識人がいたわけですが、日本の「知識人」の場合、基本的に亡命という要素はきわめて例外的である。このことが日本の「知識人」のある種の制約、あるいは構造的な規定条件になりました。

## 「戦後啓蒙」世代

なかでも興味深いのは、本書で扱われるなかで一番最後の世代です。さきほど鷺巣先生の議論でもありましたように、丸山眞男などをはじめとする、まさに「戦後啓蒙」を担った中心的世代の大きな特徴は、戦争によって留学の経験する機会を逸した世代であるということですが。これがある意味で、本書の一番のポイントになります。ところがさきほど「逆説」という言葉で強調されましたが、そのように留学の経験を逸した世代、ただでさえ欧米の知識人との日常的な交流の機会に乏しかった日本の「知識人」のなかでも、まさにみずからの学問で成長させている青年時代に、戦争のために留学することができなかった世代が、逆説的なことに近代ヨーロッパの思想と学問を深く理解した。そして日本社会の分析に独創的な達成をした。これは逆説であるということ、松本先生の本は強調しています。これが本書のポイントになるところだと思えます。いわば留学を通じて欧米の知識を導入し、それを学ぶことによって成長した日本の知識人たちのなかでもっとも不利な条件に置かれた世代が、しかしながら逆説的にもっとも近

代ヨーロッパの思想と学問を深く理解し、日本社会の学問的分析に対して大きな貢献をした。この逆説はいったい何なのであるのか、というのが本書における大きな問題提起であろうかと思えます。

## アメリカの「知識人」

次に見るアメリカの「知識人」との比較にも、非常に興味深い論点がちりばめられています。それこそ『ザ・フェデラリスト』を書いたマディソンらを中心とするアメリカのファウンディング・ファーザーズたちは、まさに「知識人」でした。政治的指導者が同時に知的指導者であったというのが、アメリカの建国の父たちの特徴です。にもかかわらず以後を見ますと、ジョン・クインシー・アダムズがアンドリュー・ジャクソンに選挙で敗れたときが一つの画期になるわけですが、建国初期におけるいわゆる「知的アリストクラシー」が崩壊し、その後はむしろ知識層が政治文化のなかで孤立していきます。いいかえると、知識層が知識があるというだけでは、政治文化のなかで優位に立つことができない。むしろホフスタッターが論じたように、強力な反知性主義の伝統が確立したアメリカにおいては、知識層が知識を主張することは社会における人気や影響力を拡大するという点において決してプラスに働かない、むしろネガティブに働く。知識層が政治文化のなかで孤立するという大きな特徴を持つようになったのが、アメリカの「知識人」の一つの特徴でした。

ただし二〇世紀、革新主義運動とともに、専門知識人たちが大幅に政策形成に関与するようになります。これは、アメリカにおいて強力な官僚制が欠如したということもありますが、革新主義の時代においては専門知識人たちが次々と政策形成に関与していく。時代もプラグマティズム、さらには社会改良への強い志向を持つ。そのなかでいわゆる政策科学とシンクタンクが発達してくる。これがアメリカの「知識人」のもう一つの特徴になります。専門的知識人が社会改良に参加する、そして具体的なポリシー・サイエンスに参加する。そしてシンクタンクのようなものを作り上げて、みずから政策提言をしていくようになったのがアメリカの「知識人」のもう一つの特徴となります。

しかし、アメリカの「知識人」とっては、その後も苦難の時代が続くわけです。赤狩り旋風がありました。彼らは社会主義あるいは無政府主義という批判の対象になります。アメリカの「知識人」のなかには社会主義者や無政府主義者が少なからずいるわけですが、保守的な雰囲気が強まるにつれて、このような人々が迫害を受けることになります。そのような時代のなか、さきほど触れたように、第二次大戦のときにはユダヤ系と亡命知識人というのが非常に重要な役割を果たします。結果として見ると、専門家がある種官僚を代替し、シンクタンクを作り、非常に実践志向、政策志向の強い専門知識人がいる一方で、大学の側にはヨーロッパの知との連続性の強い、きわめて批判的な知識人が残る。このように分極化するというところが、アメリカの一つの「知識人」の特徴となります。

## ①比較の中の日本「知識人」

さて、以上の議論の整理を前提に、日本の「知識人」はどのような特徴があると論じられているのでしょうか。第一に言えることは、フランスの「知識人」と日本の「知識人」の共通性です。議会制や政党政治が確立していくと同時に、中等教育制度が完成することによって、学校教育によって生まれた「知識人」階層が誕生する。この点においては、フランスの第三共和政と明治の日本において、ある種共通したところがあると思います。ただし日本の場合、基本的には西洋の思想と学問を導入する、逆に言うと、日本の伝統的な思想と学問がいったんここで近代の教育システムからは切断された点が重要です。西洋の思想と学問を導入するために大学制度、高等教育制度が使われるわけですが、さきほど触れたように、欧米知識人との日常的交流を欠いたという点に、日本の「知識人」の特徴があります。

結果として、常にガラパゴス化の危険性が生じます。日常的に西洋的な知識人たちとの議論がないために、日本独自と言えは聞こえがいろいろですが、一つ間違えれば世界の学問の潮流とは切り離された形で、一つの閉じられたガラパゴス的な学問となる危険性が常にある。

また、これも興味深いのですが、「三〇年の法則」というものがあります。留学を通じて何らかの欧米の知見を得て日本に帰ってきた人物が日本国内において知的指導者になると、その世代が優位する三〇年

ほどの間は、その指導者が学んだときの欧米の学問が日本でも支配的になる。ところが、その人たちが交代すると、また次の世代が欧米に行って学んで、その学問的な流行が日本でも支配的になる。つまり、三〇年おきに日本における学問の枠組みが大きく変わってしまう。このような「三〇年の法則」というような議論も紹介されています。

ある意味で言うと、日本の「知識人」は常に分野ごとに欧米における学問的流行を追いかけるあまり、最先端のものを欧米から持つてこようとして、日本における学問的蓄積をしばしば断絶させてしまう。さらには日本独自の人文・社会科学の成果が、しばしば忘却される傾向がある。ある意味で、これは今日まで続く傾向かと思えます。研究者はきわめて熱心にそれぞれの分野の世界の最先端の流行を追いかけるわけですが、日本でそれまでどういう議論をしていたかということ、すぐ前の世代のことですら忘れられてしまう、継承されない。その都度、欧米から最先端の知識が導入されるということによって、日本における学問の蓄積、連続性というものがしばしば損なわれるというのは、今日にまでつながっているある種の傾向かと思えます。

### 知識人の「異議申し立て」とシンクタンクの未発達

フランスと日本で、知識人形成において非常に似た道をたどったのですが、面白いのはフランスにおいて、ドレフュス事件が非常に重要だったことです。ドレフュス事件は、学校教育を経て成立したエリー

トたちが、職業政治家たちと対抗するきっかけになりました。職業政治家たちが代表しているものはまちがっている、自分たちこそが真のデモクラシーを実現しているのだと主張することを通じて、職業政治家たちを批判する対抗的知識人、ある種の「異議申し立て」を行う知識人が、一つのモデルになりました。フランス知識人という「異議申し立て」そして「アングージュマン」ということばが一つのキーワードになるわけですが、その原型はドレフェス事件にあるということになります。

日本の場合、そのような「異議申し立て」を行う批判的知識人像が常にあつたかといえば、疑問です。明治国家以来、むしろ国家によって育成された知識人たちは、個別的にはその時々々の政治権力に対して批判的であつたとしても、集団として知識人が「異議申し立て」を行うというのは、日本の場合はある程度限定的でした。日本の知識人の「異議申し立て」が強く意識されたとすれば、基本的には一九三〇年代から六〇年代ぐらいであり、それ以降になると日本の場合もそのようなタイプの知識人はだんだん失われていきます。

したがって、フランスの知識人においてはドレフェス事件以来、かなり長い間この「異議申し立て」をする、政治参加する知識人というモデルが支配的だったとすると、日本の場合は一九三〇年代から六〇年代に限定される。なぜこの時期に限定されるのか、あるいはこの時期の特徴は何だったのかということが、問題になるわけです。

これに対し、アメリカの知識人は基本的には、特に批判的な知識人

ほど、大学のなかでアメリカの政治文化から孤立して存在するわけでは孤立していない。しかしながら今日、昨今の学術会議問題にも象徴されるわけですが、日本においてもアカデミズムに対する反発という意味で反知性主義が見られます。日本の知識人は、アメリカの知識人ほど一般の人々から孤立はしていないと思いますが、日本においてもいまや危うい状況に変わりつつあるかもしれません。

これもアメリカとの比較ですが、アメリカの場合は専門的官僚制が弱かったために知識人がそれを代替した。その結果、シンクタンクが発達するわけですが、日本の場合には官僚制が強いために、その外部に政策科学に参与する組織はあまり発達しなかった。今日に至っても、シンクタンクは未発達であると言えるでしょう。このように考えると、フランスと日本の間で似ているところがあるけれども違いもある。そしてアメリカの知識人と比べても、日本の知識人は大分違いがある。しかし、その状況も、最近やや変化が見られるといったことを考えました。

## ② 翻訳文化としての日本の社会科学

第二の論点は、翻訳文化としての日本の社会科学です。これもやや挑発的な書きぶりではありますが、本書のなかでは水村美苗さんの『日本語が滅びるとき』がしばしば言及されます。これも非常に論争的な

議論だと思えます。水村美苗さんはみなさんご存じの通りイェール大学で学んだ文学者であり、まさに英語圏の世界における日本文学をずっと考えてきた人です。そして、日本語と英語が半々混じるような小説を書いてきた水村さんが、近年になって『日本語が減びるとき』という、一見するとナショナルリスティックにも思える評論集を書いたということが話題になったわけです。

水村さんは現代の英語文化、英語文学というものの世界的な優位に対して強い危機感を持っています。日本文学は、水村さんによれば「世界のメジャー文学の一つ」です。フランス文学がそうであるように、日本文学もまた非英語圏における世界におけるメジャー文学の一つであった。特に夏目漱石らを含む近代日本文学というのは、世界のメジャーな存在であるというのが水村さんの主張であるわけですが、そのような日本の近代文学がいまや衰えつつある。英語一本化の時代において、はたして日本文学は生き残れるであろうか。このことを非常に問題提起的に、あるいは論争的に論じたのが水村さんの本であるうかと思えます。

松本先生はこのような水村さんの議論を受け、社会科学はどうであるかを検討します。水村さんは日本の近代文学を世界におけるメジャーな存在の一つとしているわけですが、日本の社会科学ははたして世界においてメジャーな存在であると言えるか、言えないであろう、松本先生はそう指摘するわけです。にもかかわらず、欧米からの学問を移入しつつ、日本の現実を見ながら独自に展開していった日本の近

代の社会科学を、それとしてやはり評価したいということが、松本先生のねらいであろうかと思えます。本書でも「市民社会」論というのはくりかえし紹介されるわけですが、これは *civil society* あるいは *bürgerliche Gesellschaft* といった欧米の概念を翻訳するプロセスにおいて、日本で独自に展開した議論です。そして近年ではむしろ、日本における市民社会論が欧米の議論に逆輸入される現象すら起きている。ここに、日本の社会科学においても非常に特徴的なものとして、「市民社会」論を指摘することができます。このように強調されているのも、翻訳文化としての日本の社会科学の一つの焦点がそこにあると言えるからだと思います。

### 「普遍的知性への共属の意識」

その上で考えました。これは松本先生ご自身が指摘されていることですが、翻訳文化のままでいいと言っているわけではありません。あくまで、翻訳文化にとどまることなき日本の社会科学の発展を松本先生は重視するわけです。しかしながら、はたして日本の社会科学が「普遍的知性への共属の意識」をいかにして持ちうるということが問題になります。そして、日本の近代の社会科学が大衆的広がりを持っているのか、あるいはさきほど言ったフランスの知識人などと比べて、対抗的・批判的役割をどこまで果たしてきたのか、ということの問題提起されているわけです。

先程から論じていることでは、学問は世界の学問的最先端を常に追いかけるべきではありませんが、その都度世界の最先端の学問を日本に持つてくるというだけであれば、ある種の翻訳文化にとどまらず、日本独自の知的蓄積を形成し、それを継承発展させると同時に、それをガラパゴス化させず、むしろ世界の普遍的知性への共属の意識を持つことが重要になるわけですが、それがどうすれば可能なのか。私自身、非常に関心がありますし、本書のなかでもくりかえし問われている重要な問いかけであると思います。

そして、日本の近代の特質を、単に世界における日本の特殊性として捉えるのではなく、普遍的な理論としていかに分析することができるか。ここに日本の社会科学の可能性というものが問われているというのを、本書の重要な問題提起として受け止めました。

### ③ 松本・丸山・トクヴィル

昨今、経済におけるMMT理論がしばしば語られますが、私にとつて重要なのは松本先生と丸山眞男とトクヴィルのMMTのほうです。この三者はいったいどうつながりがあるのか。本書のなかで、読んでみるとおもしろい、関心のある指摘がたくさんあります。私の目から見ると、この松本先生、丸山眞男、トクヴィルにおいて何が共通しているかというと、三人とも個人主義の問題というのを非常に重視している。本書のなかでも個人主義という概念について、もちろん理

解は丸山においてもトクヴィルにおいても違うのでありますけれども、個人主義というものに対する着目というものが、あるいは三人に共通しているかもしれません。

そして松本先生が強調されているなかでもおもしろいと思ったのは、トクヴィルの知的営み自体が一つの翻訳であったというご指摘です。ある意味で言うと、アメリカに行つてアメリカについての知見を、あるいはアメリカの具体的な制度やその意味を、フランス人の読者に伝えるという、ある種の翻訳作業をしている。そして、そこにトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』のおもしろさの原因があるとする、先程から議論しているように、近代日本の社会科学が翻訳としての側面を持っていたことも、あるいは可能性として理解することができるかもしれません。翻訳というものを単に横のものを縦にするのではなく、ある種の創造性を持った一つ可能性として理解するならば、翻訳的知性というのが、あるいは三人に共通して見られる知的なフレームワークなのかもしれません。

そして、本書のなかでも後半部分において、丸山が非常な「リベラル」であったと指摘されています。ただし、「リベラル」とは何であるかということに関して、冷戦リベラルなどと比較され、現実がこうであるから仕方がない、だから現実主義になるべきだというタイプの冷戦リベラルに対して、人間の精神の自由を強調し、社会のなかの多様な側面を見ながらその自由の可能性を追求するという意味での「リベラル」であったことを強調されています。そのような意味での「リ

ベラル」であるということも、あるいは松本先生、丸山、トクヴィルの一つの共通のポイントなのかもしれません。

さらに、今回この本を読んでいて、なるほどと思ったのは、丸山が結核の治療で入院期間中にトクヴィルを一生懸命読んだことはよく知られた事実ですが、『アメリカのデモクラシー』や『旧体制と革命』も読んでいるけれど、むしろ二月革命の回想録を集中的に読んでいるという指摘です。トクヴィルの二月革命期の回想録というのは、いわば「敗北」の記録です。トクヴィルはこの時期、七月王政のブルジョワ体制が崩壊する一方で、台頭する社会主義に対しても距離を感じています。トクヴィルにとっても非常に難しい時期、「敗北」の時期であったわけですが、ある意味で丸山も、「敗北」の時期にありました。その時期まで活躍していたのが、このとき病気もあり、戦後みずからの理想とした活動が一定の挫折を迎えるなかでトクヴィルを読んでいる。ある意味で丸山が「敗北」を見つめていた時期に、トクヴィルの「敗北」の記録を読んでいるというのは、非常に興味深い問題の指摘であると思いました。

## 山崎正和について

ちなみに、私がこの本のなかでおもしろいと思ったことの一つに、山崎正和の扱いがあります。さきほど指摘しましたように、個人主義という問題が本書のなかでくりかえし問われているのですが、山崎正

和の「柔らかな個人主義」にも何回か言及されています。松本先生は山崎正和に対してかなり批判的です。議論のスタイル自身が十分にアカデミックなものであるのか、あるいは政治や権力の問題というものをきちんと論じているのかということについてかなり批判的に言及されつつも、山崎正和におけるたとえば「社交」という議論などに対しては比較的好意的に評価されています。山崎正和の「柔らかな個人主義」は、一見すると一九八〇年代の日本における消費社会を擁護する議論にも読めるのですが、よく読んでみると、一人ひとりバラバラになり、人と人との間のつながりが失われていくなかで個人が自閉していくということに対して強い問題意識があります。だからこそ山崎はやや時代錯誤的に、一八世紀的な「社交」の復活を主張するわけです。松本先生は山崎の議論を批判しつつも、この「社交」という概念に関しては両義的に論じていらっしやる。このことを私は非常におもしろいと思いました。

山崎は現代日本の個人主義に対して危機意識を持ち、だからこそ「社交」が大切だと主張し、サントリー文化財団などを一生懸命にやったことも、いわば日本における「社交」の文化を復活させようとする試みとも言えます。またサントリー学芸賞が「学芸」というものにこだわり、日本語による表現を重視しましたが、日本語における人文社会科学の独自の発展を支援したとも言えます。このような山崎の営みは、ある意味で言うところ松本先生がこの本のなかで論じていらっしやる、翻訳としての日本の社会科学、あるいは日本の人文社会科学に対する、

その可能性の追求であったのかもしれない。その意味で、実は松本先生の問題意識と共通する部分はないわけでもないと思いました。山崎正和というのは、松本先生にとって非常に気になり、批判的には論ずべき存在であるわけですが、どこかしらその営みには、松本先生の考えていることと触れあうところもあるのかなと思いました。

## 日本における「自由主義」モーメント

さきほど触れたように、松本先生は丸山眞男を「リベラル」という言葉で表現していらつしゃるわけですが、まさに日本において「リベラル」であるというこはいつたいうことなのかということも、本書のなかで考えなければならぬ重要なテーマであると受けとめました。特に松本先生が批判的に論じる冷戦リベラルと呼ばれる人たちが、「現実」を決まったものであり、それに対応するしかないと思えたのに対し、「現実」というのは実は変化するものであって、一枚岩ではなくて多層的であり、それを丁寧に読み解くなかで「現実」を変えることができると思える。そしてそのなかにおいて人間の自由というものを實現する強い政治的な構想力を丸山眞男に、あるいはトクヴィルに見出す。このような「現実」に対する構想力という問題を、日本における「自由主義的」なモーメントとは結局何なのかと合わせ、さらに考えていかねばならないと思いました。

## 著者への問い

最後ですが、著者への問いを提起したいと思います。今回の松本先生の議論においては、二〇世紀というのは「知識人の時代」であり、知識人は学校教育制度によって台頭したけれど、後の大衆化と同時に特権的地位を失っていく、その過程として二〇世紀という時代を描いていらつしゃるわけです。そしてそれは、一九八九年に最も大きな困難に行きつき、「知識人の時代」としての二〇世紀は終わりを迎えてつある、あるいはついに終わりを迎えてしまった、というのが本書における松本先生の理解であろうかと思えます。もし仮にそうであるとすれば、今日においてかつてのような普遍的な問題意識を持った偉大な知識人はもはや日本には存在しない、あるいは世界にも存在しないものかもしれません。そのような時代において、あえて知識人というものを論じることの意味は何なのであるかということ、あらためて松本先生にお伺いしたいと思います。もはや知識人というものは終わってしまったが、それを知識社会学的に、歴史学的に分析すること、ということなのか。あるいは今日なお追求すべき新たな知識人としてのあり方、スタイル、理念というものがあるとお考えなのか。いわば「知識人の時代」が終わったあとに知識人を論ずることの意味についてお伺いしたいと思います。

第二に、今回この本を通じて、松本先生はある種の翻訳文化として

スタートした日本の社会科学を論じられる一方、翻訳文化の域をこえて日本の歴史、日本の近代を鋭い緊張感において捉え、日本の社会を普遍的に分析することを通じて世界の学問へと貢献していく、そのような可能性を持ったものとして日本の社会科学を論じられました。しかし、それがはたして十分に今後継承されていくかという点、はなはだ危うい。そのことについて、問題提起あるいは危機感を表明されているわけがあります。実際、私は社会科学という名前を冠する研究所におりますが、私より下の世代がほとんどなくなってしまった今日、周りにいる社会科学者の多くは丸山眞男をまったく読んでいません。

丸山眞男という名前は知っていても、何を議論したかということをもっとく知らない社会科学者がほとんどという時代になっています。そのような時代において、日本の社会科学の遺産をいかに継承していけばいいのか。これはもちろん私自身も考えなければならぬ問題ではありますが、松本先生のお考えを伺いたいと思います。

最後の問いは、丸山眞男とトクヴィルというものを本質的に繋ぐものは何でしょうか。この本のなかでも、丸山とトクヴィルというのは異質な思想家でありながら、しばしば接点を持ち、そこには何らかの思考における繋がり、共通の問題意識というものがあるとお考えになられているように読みました。それはいわば、丸山とトクヴィルと繋ぐものであるだけでなく、松本先生を繋ぐものである。つまり、松本先生と丸山眞男、トクヴィル、このMMTを繋ぐ何らかの共通の問題意識、問題関心を論じているように思われます。それはいったい何で

あるのか。もし可能であれば今の時点から、丸山とトクヴィルの共通性はどこにあるのか、何がこの二人を繋ぐのか、そしてそれが松本先生といかに関係しているのか、教えていただければ大変ありがたいと思います。私からの報告は以上です。ありがとうございました。